

## 【高校生の部】奨励賞

『あした死ぬかもよ?』(ひすい ことろう/著)

八戸工業大学第二高等学校 1年 中村 優月

「あした死ぬかもよ?」この書名に私は惹かれた。2年前、私は従兄弟を亡くした。まだ、17歳だった。幼いときからずっと一緒にいた人が、亡くなる前の日も太陽のような笑顔を見せていた人が帰らぬ人となってしまった。そんなどん底に落とされていた私の目にこの本が止まった。この本は、人生最後の日に笑って死ぬためにはどうするべきなのか考えさせられる作品である。私たちは少しは逃げてきた人生の道もあるでしょう。しかし、冒険することも大切だと著者はいう。今の人生に満足していない人、自分を変えたい人にこの本を薦めたい。あなたは、「ほんとにやりたいことをやる人生」、「ほんとにやりたくないことをやる人生」どちらを選ぶ?

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』(汐見 夏衛/著)

県立青森西高等学校 1年 越田 楓

この本は、戦時中に引き裂かれた2人の男女が再び巡り会う物語りです。過酷な時代背景の中で、愛と希望を貫く2人の姿がとても印象的で、心に深く響きます。特に、戦争の悲惨さや時代を超えた愛の力を描いた描写は感動的で、読み終えた後もその余韻が長く続きます。私は学校の歴史の授業で、王や将軍有名な人物の業績や国家の動きに焦点が当てられがちで、昔の人たちの恋愛について考える機会はほとんどありませんでした。しかし物語の中で描かれる人間の強さと脆さ、そしてどんなに辛い状況でも大切な人を思う気持ちは昔も今も変わらず続いていくのだと感じました。是非大切な人を思いながら、この本を手にとってほしいと思います。

『コーヒーが冷めないうちに』(川口 俊和/著)

八戸聖ウルスラ学院高等学校 2年 岩間 咲樹

過去に戻ってやり直したい。以前の私は、失敗するたびにそう考え、先に進めずにいた。そんな時にこの本に出会った。この本に登場する喫茶店では、コーヒーをいれてから、冷めるまでの間だけ、過去に戻ることができる席がある。ただ、過去に戻っても過去を変えることはできない。このような条件がある中で、登場人物1人1人がそれぞれ色々な思いを抱え、タイムスリップをする。この本に出会ったことで、過去はどんなに悔やんでも変えられないが、未来なら自分次第でどんなものにもできる。そう気付くことができ、過去に悩むことほとんどなくなった。この本は前に進むときに、そっと背中をおしてくれるような、心あたたまる一冊だ。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』（東野 圭吾／著）

県立弘前南高等学校 1年 藤岡 遥菜

もし悩みを相談するなら誰に相談しますか。この本では過去から届けられた人からの相談をナミヤ雑貨店に入り込んだ男3人が解答するのですが、最終的にどんな悩みも相手が納得しています。私が中学3年生の受験期はどのように勉強に励むか、無事に合格できるか、先生や親の応援に応えられるかと、精神も不安定なときがありました。しかし、周りには同じものを背負う友達やこれまでそのようなことをいくつも経験してきた塾の先生に悩みを吐いたり、アドバイスし合ったりすることで救われたことが多々ありました。相談する大切さと頼られたら相手と向き合う2つの大切さに気づかせてくれたこの「ナミヤ雑貨店の奇蹟」を私は強くお勧めします。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』（東野 圭吾／著）

県立弘前南高等学校 1年 清野 京桜

ついついしてしまう親への反抗。高校生になり親と交流することは少なくなった。強く言ってしまったことを1人で後悔し、謝れないまま。家族なのに、大切な人なのに、どこか時々他人のように感じて冷たく当たってしまう。それは家族だけでなく、友人も恋人もお世話になった人も。言わなくちゃ伝わらないこと。相談しないとわからないこと。人には言いにくいこと。私達が1度は経験してきた複雑な気持ち。この本は「それ」を丁寧に書いている。決して全員が救われるような幸せな話ではないが、全てが繋がり読み終わったとき、心が暖かく、側にいてくれる人に感謝しようという気持ちになった。誰でも共感できるようなこの一冊ぜひ読んでみてほしい。

『グッドラック』

（アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス／著 田内 志文／訳）

県立大間高等学校 2年 佐々木 虹

私は吹奏楽部に所属しており、コンクールなどで一度も金賞受賞経験が無い。金賞を取るためにはもちろん沢山の努力が必要だが「少しは運もあるだろう」と思う自分もいた。そんな中出会ったこの本には「運は呼びこむことも引き留めることもできない。幸運は、自らの手で作り出せば、永遠に尽きることはできない。幸運の下ごしらえは、自分にしかできない。」とあった。金賞は運もあるかもしれないが、その運は偶然ではなく、努力してきたからこそ付いてきた幸運なんだと気づいた。私は去年の夏から部長となり、プレッシャーに何度も押し潰されそうになるが、金賞受賞の夢に向かって一直線に走り、ただの運だと思っていた自分を見返そうと思う。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(ブレイディ みかこ/著)

八戸聖ウルスラ学院高等学校 2年 佐々木 陽奏

英国に住んでいる、ある少年のお話。「元底辺中学校」と呼ばれる世界の縮図のような学校で、優等生の「ぼく」が家族や友人と共に成長していく物語。一カ月後英国に留学する私に先生が薦めてくれた本だが、正直全ての人に読んで欲しい本だ。私は差別に対して何も触れないのが1番という考えであったが、「それは起きている問題に対して何も知らずに無意識に差別していることと同じである」とこの本を通じて学んだ。留学中に限らず、起きている物事に対して知ろうとする、理解しようとする努力をしようと思う。この本で「ぼく」が気づかせてくれた大切なことを胸に英国へ飛び立とうと思う。全人類に薦める一冊を、ぜひ手にとってみてほしい。

『透明な夜の香り』(千早 茜/著)

県立八戸商業高等学校 1年 宇佐美 美麗愛

校庭の土の熱くて苦い香り。図書室の優しいインクの香り。職員室の少し甘そうなコーヒーの香り。学校のそんな香りが好きだ。「香りは記憶と結び付き、永遠を生み出す。」これは、この本を読んで一番私に刺さった文章だ。私は剣道場の重たい汗の香りが嫌いだ。中学時、私は剣道部だったが、努力が足りず、正選手になれなかった。剣道場の香りは、私の悔しい過去を目覚めさせる。それは私にとって辛いことだ。しかし、この本は、過去と向き合うことの大切さ、過去の失敗から学び有意義な人生を生きることの尊さを教えてくれた。あなたも、限りある青春に悔いを残さず、記憶に残る青春の香りをみつけてほしい。

『大丈夫じゃないのに大丈夫なふりをした』(クルベウ/著 藤田 麗子/訳)

県立五所川原農林高等学校 1年 白川 昂希

題名に惹かれた。僕のことかと思った。

何にも好きなものがなくて、部活も勉強も親や友達に言われた通りにやっていて、でも好きじゃないから全然楽しくなくて、毎日がストレスで、心は傷だらけで、新しいことに挑戦するために必要な勇気が出てくるような元気がそもそも無かった。もっと早くこの本に出会えていたらと思う。「大丈夫、大丈夫」そう言って、前に進むことも確かに大事だ。でも「大丈夫じゃない」そう言って立ち止まり、この本を読みながらじっくり自分の心を見つめてみてほしい。自分をすり減らしてまで他人に合わせなくていい。自分を大事にしながらか生きていっていい。背中を押してくれるはずだ。